

幻想郷野球録

地雷一等兵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スペルカードルールが普及しながらも、日々の娯楽に乏しい幻想郷。

そんな時にある新しい遊びが飛び込んだ。

それは「野球」

ボールとバットがあれば誰でも楽しめる、そんな球技が普及した幻想郷では各勢力がチームを組んでいつものように試合が行われ、その年の優勝チームを決めることとなった。

これはそんな野球に情熱を傾ける幻想郷住民達の物語である。

目次

チーム紹介

紅魔館スカーレットデビルズ

1

永遠亭ムーンラビッツ

4

白玉楼ホワイトファントムズ

7

妖怪の山マウントフェイス

10

旧地獄グラウンドオーガス

13

命蓮寺セイントロータス

16

本編 第1節

第1イニング

19

第2イニング

24

第3イニング

41

第3イニング

48

part 1

part 2

チーム紹介

紅魔館スカーレットデビルズ

スターティングメンバー

- 1 二 小悪魔（こあ）
- 2 遊 十六夜咲夜
- 3 捕 紅美鈴
- 4 中 フランドール・スカーレット
- 5 投 レミリア・スカーレット
- 6 三 チルノ
- 7 右 ルーミア
- 8 左 大妖精
- 9 一 パチュリー・ノーレッジ

魔球とも称される豪速球を持ち味にする先発完投型のエースレミアを始め、鉄壁の二遊間や豪打の紅美鈴・フランドールのクリーンナップなど、全体的に高い水準で纏まったチーム。毎年のように優勝争いに絡んでいる。

・レミリアⅡスカーレット（投手）

：チームを支えるエース。変化球はSFFとカーブ、スライダーの三種類。一番の武器は伸びのあるストレートであり、魔球とも称される。

エースでありながら、五番打者でもあり、打撃面でもチームを引っ張っている。

・フランドールⅡスカーレット（外野手）

：スカーレットデビルズの打線の中核を担うスラッガー。長打が光るパワーヒッターであり、毎年ホームラン王争いの中心にいる。

また外野手としても優秀であり、外野最深部からホームまでレーザービームのような返球を行える。

・十六夜咲夜（内野手）

：スカレットトデビルズ鉄壁の二遊間の一角。守らせても打たせても完璧で瀟洒な選手。

守らせれば相棒小悪魔との完璧な連携が相手の進塁を防ぎ、打てば左右自在な広角打法がチャンスを広げる。

どんなプレイもそつなくこなすパーフェクトプレイヤーである。

・紅美鈴（捕手）

：スカレットトデビルズの扇の要である捕手を務める。

エースレミアアスカレットの恋人房であり、マウンドでの彼女を励ます存在である。

打者としても有能であり、長打力と的確性を兼ね備えたバッティングスタイルで確実に4番のフランドールまで繋げるのが信条。

攻守ともに頼れるお姉さんである。

・パチュリーノーレッツジ（野手／投手）

：七曜の魔女の異名で知られるがファーストにいるときは基本的に置物である。

一応控えの投手でもあるがスタミナがないため、ワンポイントリリーフのような形で登板する。投球スタイルはこれでもかと言うほどの変化球を巧みに操り、的を絞らせないで打ち取るタイプ。

・小悪魔（内野手）

：スカレットトデビルズ鉄壁の二遊間のもう一人。俊足とグラブ捌きでもってセカンドを守る守備職人である。

相方である咲夜とのコンビネーションは抜群であり、無失策の名セカンドとも呼ばれている。

打撃では俊足を活かして相手投手を引っ掻き回すことに長けている。

・チルノ（内野手／投手）

：レミアアの控えに回る投手の一人。スタミナもあり、レミアアの調子が悪いときは先発投手として登板することもある。思いつき

の良い投球と感情を目一杯表現する愛らしさからファンは多い。

打者としても有能であり、フランドールやレミリアが返し損ねたらンナーをホームに返す役割を担っている。

・大妖精（外野手）

∴チルノ加入と同時に入団した。

大きく秀でた部分はないが、その一方で酷く苦手な分野もないなど、よく言えば万能、悪く言えば器用貧乏な選手である。

他の面々に比べると地味な印象が拭えないが、それでもスカーレットデビルのメンバーであり、大抵のことはそつなくこなす。

・ルーミア（外野手）

∴守備に関しては大妖精同様そつなくこなすのだが、いかんせんバツテイングが大味過ぎるため今の打順に収まっている。当たればそれなりにデカいのだが、当たる場面が少ないため、何とも言えない。

基本的には守備側の人間（妖怪）である。

永遠亭ムーンラビッツ

スターティングメンバー

- 1 二 因幡てゐ
- 2 遊 鈴仙・優曇華院・イナバ
- 3 三 上白沢慧音
- 4 一 蓬莱山輝夜
- 5 中 藤原妹紅
- 6 左 レイセン
- 7 右 青蘭
- 8 捕 鈴瑚
- 9 投 八意永琳

高確率でビククイニングを作り出す上位打線と6番レイセンから始まる小技と大技を組み合わせた下位打線による乱打戦のぶつかり合いで試合をぐちゃぐちゃにして勝ちを拾うチーム。

先発八意から妹紅への継投策を活かして相手を押さえるのも特色の1つ。

・蓬莱山輝夜（内野手）

：ムーンラビッツの4番打者。自慢の怪力でもって長打を狙うホームランバッターである。変化球に強く、大抵のボールなら途中でバットの軌道を変えてミートすることが出来る。

積極的にホームランを狙っていききたいと常々口に出している。大量得点による乱戦を狙うムーンラビッツにとって大事な存在である。

・八意永琳（投手）

：大抵の試合で先発を務めるムーンラビッツの頭脳。

ピッチングスタイルは速球と変化球を織り混ぜて打たせて取るタイプ。

基本的にリソースの大半をピッチングに回しているため、打撃面ではバッターボックス内の置物となっている。それでも甘い球を投げれば手痛い一打を食らわせるくらいには打てる模様。

・ 鈴仙Ⅱ優曇華院Ⅱイナバ（内野手）

：ムーンラビッツの二番打者を務める選手。一番打者のてゐとは口喧嘩をよくしながらもなんだかんだ良いコンビである。

堅実な打撃スタイルでランナーを進め、着実にチャンスを広げるのが主な役割である。選球眼にも優れ、きっちりとストライク・ボールを見切れるのも彼女の強みだろう。

・ 因幡てゐ（内野手／投手）

：ムーンラビッツの斬り込み隊長であり、もう一人の先発投手である。

両投げ・両打ちという器用さで投手の時は両利き用グローブを使つてどちらの手で投げるか予測させないトリッキーなピッチングスタイルである。

打撃面は俊足と器用さを活かしてまずは出塁し塁上から相手投手を掻き回す。

・ 上白沢慧音（内野手）

：長打力を捨て確実性を取ったバツティイングスタイルが特徴の三番打者。

外野の頭を越すような長打は基本的に狙わず、確実にランナーを進め、輝夜に回すことに徹している職人気質な打者。実際の長打力はかなりのものだが、個人プレーは捨ててチームのために打席に立っている。

・ 藤原妹紅（外野手／投手）

：ムーンラビッツもう一人の4番にして、クローザー。高いバツティングセンスと長打力が噛み合った結果、GBLでも上位に入るスラッガーとなった。

投手としてマウンドに上がれば三振の山を築く。火の玉ストレートと称される豪速球とキレのあるファストボールが武器である。

・ レイセン（外野手）

：玉兔トリオの不憫な子。

小技が得意な打者で、ランナーを進める、相手守備を引つ掻き回すことにかけてはこの打線でも一、二を争うレベルである。

直前の打者達が派手すぎるせいで目立つことはあまりないが、スコアを見ると彼女の作ったチャンスからの得点も少なくない。

・鈴瑚（捕手）

：玉兔トリオの頭のキレる子。

ムーンラビッツ投手陣を支える名捕手。打者一人一人の特徴を頭に入れた配球で失点を抑え、チームを上位争いに参加させている。

打撃面ではレイセンと同じく小技による出塁を得意とし、器用に立ち回っている。

・青蘭（外野手）

：玉兔トリオの頭の緩い子。

下位打線ながら豪快なバッティングで会場を沸かせるバッター。レイセンが出塁し、青蘭が長打を放ち、鈴瑚が返す流れは様式美とも言える。

明るい性格のムードメイカー。

白玉楼ホワイトファントムズ

スターティングメンバー

- 1 二 橙
- 2 一 レティ・ホワイトロック
- 3 三 八雲紫
- 4 捕 魂魄妖夢
- 5 遊 八雲藍
- 6 右 メルラン・プリズムリバー
- 7 左 リリカ・プリズムリバー
- 8 中 ルナサ・プリズムリバー
- 9 投 西行寺幽々子

プリズムリバー三姉妹による鉄壁の外野陣と、4番妖夢による高い得点率を武器に戦うチーム。

俊足の一番打者や、巧打の光るクリーンナップで堅実に得点を重ねていき、巧みな守備陣による守りでリードを守りきるのがチームカラー。

・西行寺幽々子（投手）

：ホワイトファントムズのエース。他のチームのエース達に比べると球速は遅い方に分類されるがその分、他の投手達にはないキレのある多彩な変化球を武器としている。

打たせて取ることも得意だが、その気になれば三振も狙える万能タイプ。

・魂魄妖夢（捕手）

：ホワイトファントムズの攻守を支える仕事人。常に冷静に場の状況を見渡せる捕手であり、投手のメンタルを支える。打者としては巧みなバット捌きでランナーを確実に返す打者である。

GBLの4番打者として見れば長打力で1歩譲るものの、打率の面で言えばトップクラス。

・八雲紫（内野手／投手）

…三番打者を打ち、また幽々子と双璧を為す投手。

チームトップクラスのバツテイニングセンスを持ち、その安打率はGBLでも上位に入るほど。その技量を活かして妖夢に繋げ、得点に絡む。

投手としてマウンドに立つと、右のオーバースローで、緩急を織り混ぜたピッチングで打ち取るタイプ。

・八雲藍（内野手）

…五番打者としてホワイトファントムズの中核を担う打者。正確な読みでコースを読み切り、きっちりヒットを量産する巧者なタイプ。

内野を守らせればセカンドの橙との連携でヒットを許さない守備職人の顔を見せる。

・橙（内野手）

…俊足を活かして出塁し、足で投手にプレッシャーを掛ける斬り込み隊長。

足による出塁率でチームの得点に大きく貢献している。

守備になれば足を活かした広い守備範囲で一二塁間のヒットを出させない。

・レティールホワイトロック（内野手）

…二番打者として粘りのバツテイニングを見せるスタイルの打者。しっかりと安定したフォームからの打球は鋭く、きつちりと相手野手の間を割っていく。

スカーレットデビルズのチルノとは仲がよくオフシーズンになるとよく二人で山に籠るらしい。

・ルナサールプリズムリバー（外野手／投手）

…ホワイトファントムズの三人目の投手を兼任する外野手。投手としてのスタイルは幽々子と紫の中間のような感じで、豊富な変化球と緩急を使つて打たせて取ることを得意としている。

打順こそ八番を打っているが打率は高く、バッティングセンスは紫や妖夢に劣らない。役割としては塁にいるメルランやリリカをホームに返す立場を担っている。

・メルランIIプリズムリバー（外野手）

：いつものほほんとしたチームのムードメイカー。どんな場面でも笑顔を忘れない鋼の心臓の持ち主でもある。

ポジションはライトを担当し、持ち前の強肩からのバックホームで何度も失点を防いできた。

・リリカIIプリズムリバー（外野手）

：頑張り屋で努力家。いつも熱心で一生懸命、何よりもチームのガッツの持ち主。どんな打球も諦めずに食らい付き、フライに打ち取る外野手。

レフト方向に飛んだフライの大半は彼女のお陰でアウトに出来る。

妖怪の山マウントフェイス

スターティングメンバー

- 1 中 射命丸文
- 2 二 犬走椋
- 3 遊 河城にとり
- 4 投 八坂神奈子
- 5 三 東風谷早苗
- 6 一 鍵山雛
- 7 捕 洩矢諏訪子
- 8 左 秋静葉
- 9 右 秋穰子

豪打豪投を誇るエース兼4番の八坂神奈子を中心にした爆発力抜群の打線を武器に俊足の文、椋で投手を引っ掻き回し、小技の利くにとりや諏訪子、雛で守備を引っ掻き回していくスタイルが特徴的である。

・八坂神奈子（投手）

：名実ともにマウントフェイスの大黒柱。木製バットを真つ二つにする豪速球とどんなボールもスタンドに放り込む豪快なバッティングでファンは多い。どんな相手にも常に全力のストレートで正面から圧倒することを好み、それで試合に負けてもチームメイトは何も言わない。

・洩矢諏訪子（捕手／投手）

：エース八坂神奈子の恋女房を務める正捕手。神奈子の全力投球を彼女しか受け止めることが出来なかったために捕手になったが、投手をさせてもかなりの実力を持つ。

諏訪子のピッチングは神奈子と逆で変化球を使って打者の打ち気

を逸らして打ち取るもの。

・東風谷早苗（内野手／投手）

…マウントフェイスのクリーンナップを務める強打者の一人。どんな時でも物怖じせず、声を出してチームを盛り上げるアジテーター兼ムードメイカー。

しかし守備の面では経験の少なさが災いしてかやや深読みすぎる嫌いがある。それでも遅れた反応を強引にどうにかする身体もあり、なんとかカバーしている。

・射命丸文（外野手）

…GBLでも一、二を争う俊足を持つマウントフェイスの斬り込み隊長。内野安打を量産し、塁上から相手を引っ掻き回すため、マウントフェイスとの試合では最警戒対象になることもしばしばある。

外野の守備は自慢の俊足を活かしてどんなフライも掴み取る。

・犬走椀（内野手）

…二番打者を務め、二遊間の守備を任せられるいぶし銀なプレイヤー。塁に出た文と協力して相手投手を揺さぶり、確実にチャンスを広げ、クリーンナップに繋げる。

守備につけば共に二遊間を守るにとりとの抜群のコンビネーションでどんな打球もヒットにさせない。

・河城にとり（内野手）

…椀と共に二遊間を守る守備職人。打線では中核のクリーンナップ、その三番を任されている。バッティングでは長打を狙うよりも確実に主砲の神奈子に繋げることを自分の役割としており、粘り強いバッティングで確実に塁に出る。

・鍵山雛（内野手）

…マウントフェイスの一塁手。外の世界では秘打と呼ばれる回転打法の使い手でもある。

時おり小さなミスをするところが玉に傷、そのミスの面さえ目を瞑ればかなり高い能力をもった選手である。

・秋静葉（外野手）

…秋の神様その1。妖怪の山マウントフェイスには八坂神奈子の

誘いによって加入した。シャープなバッティングフォームからの確にヒットを打つことに長けているが、いかんせん上位打線のメンバーが強烈な印象を残すため、地味に見えてしまう。

・秋穰子（外野手）

∴秋の神様その2。静葉と同じように神奈子の誘いによって加入した。バッティングは静葉ほど得意ではないがその分、肩が強くピンポイントにノーバウンドで送球することができる。

旧地獄グラウンドオーガス

スターティングメンバー

- 1 遊 火焰猫燐
- 2 一 古明地さとり
- 3 投 霊鳥路空
- 4 三 星熊勇儀
- 5 捕 伊吹萃香
- 6 二 黒谷ヤマメ
- 7 右 水橋。パルスィ
- 8 左 キスメ
- 9 中 古明地こいし

変化球に強い萃香と直球に強い勇義の鬼二人を中核に据えた打線による火力を武器にするチーム。しかし、その二人が通用しないと途端に得点力が下がってしまう。よくも悪くも打線の中核は鬼の二人である。

・星熊勇儀（内野手／投手）

…直球に滅法強く、変化球はやや苦手な4番打者。苦手と言っても直球に比べればの話であり、そこらの打者と比べるとかなり打てる模様。

普段の言動同様に豪快なバッティングを好み、常にフルスイングする姿は投手からすれば恐怖である。出会い頭の事故からのホームランも珍しくなかったため、彼女との勝負を嫌がる投手も少なくない。

・伊吹萃香（捕手）

…変化球に強く、速球にはやや弱いらしいがこれは自称であるので本当の所は定かではない。速球も軽々とホームランにしていることもあり、彼女もまた星熊勇儀同様に変化球に比べて速球が苦手、とい

うことかもしれない。

常に酔っているかのように上体を前後に揺らした構えが特徴的で、そんな力が抜けた状態から放たれる力強いスイングでボールをスタンドに持っていく。

・古明地さとり（内野手）

：鋼のようにまったく動かない死んだ表情筋が特徴的な一塁手。

試合の時は八雲印のガムテープでサードアイを封じており、心を読めないようにしている。

右打ちの得意な打者で、先に出塁しているお燐をしつかりと進塁させることに定評がある。

・古明地こいし（外野手）

：旧地獄グラウンドオーガスのセンターを務める強肩の持ち主。勘の良さからくる打球の先読みでセンター方向への大抵のフライは取られてしまう。

しかしバッティングはまだまだ未熟であり、荒削りな部分も多いため、現在の打順に収まっている。

・火焰猫燐（内野手）

：俊足を活かして一番打者を務める内野手。バント等の小技も上手く、どうにかして塁に出ようとすする執念の持ち主。

しかしその分他のチームからの警戒も強く、上手く塁に出れないこともしばしばある。

・霊鳥路空（投手）

：旧地獄グラウンドオーガスの先発を任される投手。球威のある速球とキレのある速いフォークが持ち味。

先発しそのまま完投できるスタミナの持ち主であるが、1度崩れるとなかなか立て直しが出来ないというメンタル面の弱点がある。

・黒谷ヤマメ（内野手）

：守備の中核を担う二塁手。バッティングはセンス任せの部分があるがそれでもあの鬼達の次点である六番打者を任されるほど。

守備職人でもあり、シヨートのお燐とのコンビネーションは抜群。

・キスメ（外野手）

∴黒谷ヤマメの誘いに応じてグラウンドオーガスに加入した外野手。肩が強く、ホームへの送球力はなかなか高い。

しあしバッティングが苦手で、勢いに乗れていないとほぼ打てない。

・水橋パルスイ（外野手）

∴旧地獄グラウンドオーガスの外野手3人娘の纏め役。3人の中では一番肩が強く、バックホームの信頼度は随一である。

また目が良く、選球眼を活かした慎重なバッティングが取り柄。

命蓮寺セイントロータス

スターティングメンバー

- 1 中 封獣ぬえ
- 2 捕 ニツ岩マミゾウ
- 3 右 雲居一輪
- 4 三 寅丸星
- 5 一 聖白蓮
- 6 投 村紗水蜜
- 7 遊 多々良小傘
- 8 二 ナズーリン
- 9 左 幽谷響子

チーム紅魔館と同様に高い水準で纏まったチーム。エースの村紗は威力のあるストレートとキレのある変化球を自在に使い分ける器用な投球を行い、気迫で抑えるチームの大黒柱である。

打線もクリーンナップの3人を中心に、手堅く点を取っていき、エースを支える。

・聖白蓮（内野手）

：命蓮寺セイントロータスの代表選手。パワーと安定性を両立させた5番打者である。常に虎視眈々とホームランを狙っており、気の抜けた投球をしようものなら直ぐ様スタンドに叩き込まれる。

4番寅丸の影に隠れがちではあるが、この聖もまた恐ろしい打者である。甘い球を見逃さず、寅丸との対戦で精神的に疲労した投手の隙を逃さず追い討ちを仕掛け、更なる追加点を狙う。

・寅丸星（内野手）

：命蓮寺セイントロータスの4番打者。打席に立つと普段のような優しい雰囲気はなくなり、毘沙門天の代理としての威圧感溢れる存

在感を放つ。

4番として大事なことをしつかり持った打者であるが、特に得点圏打率が凄まじく、ランナーがいるときの打率はGBLでもトップの数字を誇る。

彼女との対戦した投手は口々に「野生の虎を見た」と語る。

・雲居一輪（外野手／投手）

…命蓮寺セントロータスのクリーンナップを務めると同時に、控えの投手でもある。

打者として打席に立つと抜け目なくしつかりと外野の頭を越す当たりを連発しチャンスを広げ後続の寅丸や聖へと繋げ、投手としてマウンドに上がると右のオーバースローから放たれる威力のある重いストレートと変化の激しいナックルボールが持ち味。

投手、野手ともにどちらもGBLの中では上位に入る実力を持っている。

・村紗水蜜（投手）

…命蓮寺セントロータスの絶対的エース。

右のアンダースローであり、浮き上がってくると錯覚するほど低い位置から投げられる速球とキレのある変化球が持ち味。球種は高速シュート、シンカー、カットボール、カーブを持っている。

セントロータスの精神的支柱も兼ねており、彼女の活躍はチームに活力をもたらしている。実力も高く、気持ちで闘うタイプの投手。

・ナズーリン（内野手）

…エース村紗を盛り立てる鉄壁の内野陣の一角。打球に対する嗅覚が鋭く、当たった瞬間に打球方向へとダッシュを始める。そのため守備範囲が広く、一二塁間の打球のほとんどをカバーしている。

二遊間は相棒の多々良小傘とのコンビネーションにより、ゴロでは抜けないと言われるほどに強固である。

・封獣ぬえ（外野手／投手）

…命蓮寺セントロータスの斬り込み隊長であり、クローザー。全体的に油断ならない打者の多い命蓮寺打線の中でも「足」の面で気の抜けない打者。

ぬえが塁に出た回は確実に点が入ると言われており、その逸話の通り彼女が出たイニングの大半では得点が入っている。

・多々良小傘（内野手）

…一本足打法が特徴的なショート。勢いに乗った彼女のバッティングは目を見張るものがあり、時おりスタンドまで打球を運ぶこともある。

本人は打撃よりも守備側の選手だと言っているがその通りで試合で目立つのはバッティングよりもその巧みな守備である。

・幽谷響子（外野手）

…肩が強く、外野最深部からの矢のような送球に定評がある。その為レフト方向へのフライでタッチアップを狙うチームはほとんどない。一部の選手はその強肩に挑むことも稀にあるが。

・二ツ岩マミゾウ（捕手）

…捕手として投手陣を引っ張るセントロータスの頭脳。抜け目のない打者としても各チームに知れ渡っており、命蓮寺の要注意人物の一人。

各チームの打者の特徴は全て頭の中に入っており、それを基にした的確なリードで投手を支える恋女房。

本編 第1節 第1イニング

夜の幻想郷、完全に日が落ちきった夜の空間の中にある大きな人工の明かり。

大きく描かれたダイヤモンドと緑の映える芝、そんなグラウンドの中心に紅魔館の主、レミリア・スカーレットは立っていた。

いつものナイトキャップは野球帽に、いつものドレスから野球のユニフォームに着替えた彼女は周りよりも一回り高いマウンドの上で打席に立つ蓬萊山輝夜を睨み付けている。

一方でそんな鋭い眼光に晒されている輝夜は普段と変わらない不敵な笑みを浮かべてバットを構える。

最終回の裏、ツアーアウトで、ランナーはセカンドに3番の上白沢慧音。

1打で同点、ホームランが出ればサヨナラ勝ちの場面だ。

緊張の糸が張り積めるこの状況でレミリアの恋女房であるキャッチャーの紅美鈴はミットを叩いて鳴らし、マウンド上のレミリアへと笑いかける。

「大丈夫ですよ、お嬢様、いつも通りなら大ジョーブですっ！」

ニカッと爽やかに歯を見せて笑う美鈴にレミリアは優しい笑みを浮かべてプレートにセットする。

もはやランナーなど見えていない、眼中にないと言わんばかりにレミリアはゆっくりと腕を掲げその小さな体を目一杯使って投球モーションに入る。

一対一の真剣勝負というレミリアの意思を感じ取った輝夜はニコリと笑い、バットをキツく握り締めた。

(さあ輝夜…、打てるものなら打ってみなさい！)

(面白いわね。なら、打ち砕かせてもらおうわ…！)

マウンドと打席の二人はお互い笑みを浮かべている。それは普段浮かべるような柔和なものではなく、好戦的な獣のそれだ。

レミリアは幼く見える小さな体を、そのバネを全て限界まで使う。ギリギリとムチのように腕をしならせて放たれた豪速球。

それは美鈴の構えるミットへと吸い込まれるように飛んでいく。

豪と音を立ててミットへと放たれたボールに輝夜は躊躇いなく踏み込んでバットを叩きつける。

カッという耳に心地の良い音が響いたかと思えば、その次の瞬間にはスパンツという乾いた音が球場に響き渡った。

「ストライーッ！」

レミリアの放ったストレートは輝夜のバットを掠め軌道をほぼ変えることなく美鈴のミットに納まった。

(ここに来てまだ球威が上がるのね…、ますます面白いわ。)

(打たせない。打たせるものか！)

輝夜は1度打席を外し、バットのヘッドでスパイク裏の土を落とす。そうして頭の中を切り替えてからもう1度打席に立ちバットを構えた。

飄々とした態度を崩さない輝夜をレミリアは変わらず見続けて手の中のボールを弄る。

そして大きく息を吐き出してからまた投球モーションに移った。

セカンドランナーの慧音も二人の勝負に邪魔をするまいと二塁ベースの上で腕を組んでいる。

「ああああああつ——だああッ!!」

雄叫びを上げながら小さな体を目一杯に使ったフォームでまたレミリアはボールを投げる。

またもや豪と音を立てながらミットへと突き進むボール、しかしそれはコースの甘い絶好球だった。

(ここだッ！)

ザツと鋭い踏み込みから繰り出されるコンパクトながらも力強いスイングがレミリアのボールに襲いかかる。

観客の誰もがホームランだと思った瞬間、輝夜のバットは空を切っ

た。

「ツ!?!」

「ストライーツ! ツーツ!!」

完全に仕留めたと思った輝夜は手応えのなさや審判の声に慌てて後ろを見る。そこには股下にミットを構え、ボールを体で止めた美鈴の姿があった。

(ツ…変化球…?!)

驚愕の表情で輝夜はレミリアへと振り向く。するとレミリアはそんな輝夜の顔を見てしてやったりと言った顔になる。

「や、ら、れ、たく。」

「フン、バカみたいにストレート一本勝負なんてするわけないでしょ。」

したり顔を浮かべながらレミリアは美鈴からボールを受けとる。

輝夜は気を紛らわせるように打席の土を整えてバットを構え直す。

そんな彼女にレミリアはボールを突き出した。

「……予告ストレートってこと?」

「ええ、その方が面白いでしょ?」

怪訝な顔を浮かべる輝夜にレミリアは笑い掛ける。

そんな屈託のない彼女の笑顔をみて輝夜はなるほどと納得したように口の端で笑みを浮かべ、キックバットを握り締めた。

「さあ行くわよ。」

「かかって来なさいな。」

ゆったりと振りかぶり、レミリアは投球モーションを開始する。

しなやかで強靱な体、その内側に包まれた強いバネを全て使い大きく踏み込んで、それこそ比喩でもなんでもなく全ての力を十全に使ってレミリアはボールを放つ。

空気を切り裂くようにして放たれたレミリアのストレートは真っ直ぐにど真ん中に構えられた美鈴のミット目掛けて飛ぶ。

「ツ——!!」

そんなストレートにも気圧されずに輝夜はバットを振る。当てに行くなどというせせこましい真似はしない。それこそがレミリアへ

の最大の敬意だと考えたからだ。

ズパアン——と乾いた、大きな音が球場全体に響き渡る。

その音は輝夜の三振、そして紅魔館の勝利を意味していた。

「ストライカー！バッターアウト！！ ゲームセット！！」

審判による試合終了を告げる声、その声にグラウンド上の紅魔館ナインは一斉にマウンドにいるレミリアへと詰め掛けた。

「セーの、わーしょいつー！！」

レミリアのもとに詰め掛けたナイン達は疲労困憊な彼女の体を寝かせると一斉に上空へと放り投げる。

突然行われた胴上げに慌てふためくレミリアからは先ほどまでの、マウンド上で見せた威厳ある風格は微塵もなくなっていた。

「……………」

「輝夜…。」

打席の中で呆然とマウンドを見つめながら立ち尽くす輝夜に二塁ベースから帰って来た慧音が話し掛ける。

慧音に話し掛けられ、やっと我に帰った輝夜はポツリと小さく話し始めた。

「負けたのねえ、私…。」

「ああ、そうだな。」

「…これは本当に悔しいわね。 ……博麗の巫女に負けたとき以来の悔しさだわ…。」

そう呟きながらギリリと彼女は右手のバットを握る。そんな悔しがる彼女を見て慧音はふむと息を吐いて輝夜の肩に手を置いた。

「なにまだ来年があるさ。それまで特訓して、今度はこっちが勝てば良いだろう?。」

「……………そうね。また妹紅にバッティングピッチャー頼まなきやね。」

輝夜はそう言って慧音に笑い掛けると高々と胴上げされて半べそかいているレミリアの方に駆け寄る。

そんな輝夜の行動につられて、チーム永遠亭のメンバーも、そして観客席でこの試合を見ていた面々も柵を乗り越えてマウンドに集まる紅魔館ナインへと詰め寄った。

ここは幻想郷、スペルカードルールの他に、野球が娯楽として普及した世界である。

第2イニング

ブンツブンツ…と夜の白玉楼の庭で空気を切る音が響き渡る。
その音を立てているのは白玉楼の庭師にして、チーム白玉楼の4番、魂魄妖夢だ。

額に玉の汗を浮かべながら彼女は無心でバットを振るっている。
洗練され、鋭く振られるバット、そして彼女の姿はまさに4番打者という威風を感じさせる。

そんな彼女に声を掛ける者がいた。

「妖夢、頑張るのも良いけれど、明日は試合なのよ？ そろそろ休みなさい？」

「幽々子様…、はい。ですがあともう少しだけ。」

白玉楼の主である幽々子の言葉に頷きつつも妖夢はバット振る手を止めない。

そんな彼女に幽々子はやれやれと言ったような風に溜め息をついて縁側に座った。

「まったくもう…。妖夢、明日は私も頑張るわね。」

「はい、明日は勝ちましょう!!」

幽々子の言葉に妖夢は笑顔を浮かべてバットを振る。

こうして白玉楼の夜は更けていくのだった。

翌朝、幻想郷唯一の球場には大勢の観客が押し寄せていた。

もともと娯楽の乏しかった幻想郷においてこのようなスポーツが観戦できるとあっては人気が出るのも当然というもの。

今日の試合はチーム白玉楼対チーム妖怪の山である。

人里でも話題となっている神社の率いる（里の人にはそう見える）チームと人里で人気な庭師の少女のチームとの試合はその前日から並ぶ者がいるほどに注目が集まっていた。

「ふふ、大盛況ね。」

「そうね。」

チーム白玉楼のベンチではユニフォーム姿の幽々子と紫が暢気に世間話をしていた。

二人ともいつもの帽子ではなく野球帽を被っている。

そんな暢気なベンチの前では妖夢や藍などがブンツブンツと素振りをし、橙がダッシュで塁間の距離を往復している。打線の中核を担う彼女らの気合は充分といったところだろう。

そこから離れたところではプリズムリバー三姉妹がボールを3つ使ってキャッチボールを繰り返して、観客達を盛り上げている。

「あやややや、妖夢さん、またまた腕を上げたみたいですねえ。」

そう言つてパシヤリとカメラのシャッターを切るのはチーム妖怪の山の斬り込み隊長、射命丸文だ。

その隣では静かに瞑目したままバットを握り、精神統一を行う犬走椀と観客相手に手を振つてアピールする東風谷早苗の姿がある。

「大丈夫ですよ。こっちには神奈子様と諏訪子様もいますし、それに天狗のお二人も黙って負ける気はないんでしょう?」

「あややや、勿論ですよ。妖怪の山の天狗としては舐められたら終わりです。」

「……、やるからには全力で勝ちにいきます。それだけです。」
文はニヤリと笑い、椀は力強い声でそう言った。

両チームともに気合充分な状態で始まった試合は両者譲らない展開となった。

「あ、あややややっ!」

「くっ……、変化球のキレが……!」

「ひゅい?!」

初回、先攻のチーム妖怪の山は射命丸文、犬走椀、河城にとりの3人ともが先発投手幽々子の操る多彩な変化球に対応仕切れず三振・凡

打に打ち取られチェンジとなった。

だが――

「うええええっ!?!」

「あーらーまー…。」

「さすがに…、速いわね…。」

チーム妖怪の山のエース兼4番の八坂神奈子の豪速球により、橙、レティ・ホワイトロック、八雲紫の3人とも手も足も出ずに三者三振に打ち取られた。

そして次の回、回ってくるのはチームの大黒柱、八坂神奈子。背中に背負った注連縄と御柱を豪快に空へ投げ捨てるというパフォーマンズで観客を沸かせ、打席に立つ。

圧倒的な威圧感でバットを構える神奈子を前にしても幽々子はいつものようにおっとりした表情だ。

(…：うん、いつもの幽々子様だ。これなら心配はいらないな。)

キャッチャーマスク越しに神奈子と幽々子を見ていた妖夢だが、幽々子の様子に緊張も気負いすぎもないと分かると、対神奈子用に組み立ててきた配球のサインを出す。

そのサインに領いた幽々子はコクリと頷きピッチングモーションに入る。

ゆっくり、ゆつたりとした投球フォームからサイドスローで放たれたボールは真っ直ぐに内角低めに向かって飛ぶ。

(コースが甘いねえ!)

神奈子は足を開いて踏み込んで甘く入ってきたボールを思いつきりひっ飛ばした。

カッという小気味の良い音が響き、ボールは放物線を描く。神奈子の打球に観客達は声を上げてボールの行き先を見守る。

しかし、打った本人の神奈子は苦々しい顔を浮かべていた。

高々と打ち上げられた打球はその高度を落としていき、センターのルナサのグラブに納まった。

(ちい…、打たされたか…。手元で小さく曲げられたね…。)

神奈子がセンターフライに打ち取られ、続く早苗と雛も同じように凡打に打ち取られた。

『2回の裏、チーム白玉楼の攻撃は、4番、キャッチャー、妖夢さん、背番号、2——』

ウグイス嬢のコールを聞いて、待機していた妖夢が打席に立つ。

力んだ様子もなく、自然体な彼女の構えに神奈子は笑う。信者達に向けるような慈愛に満ちた笑顔ではなく、かつて諏訪大戦で諏訪子との戦いで見せたような闘争心溢れる笑顔だ。

(……私が打って少しでも流れを引き寄せる……！)

きゅつとグリップを握り締めた妖夢は大きく息を吐きながら足場を整える。

そして妖夢が構え終わると神奈子が大きく振りかぶる。

マウンドの土を踏み締め、全体重を乗せるような大きなフォームから繰り出されるストレートはズドンという大きな音を立てて諏訪子のミットに納まった。

「ストライーーッ！」

「イタタ……。神奈子、気合い入れすぎじゃない？」

ミットからボールを取り出した諏訪子はプランプランとミットを嵌めた左手を揺らしながら返球する。

風を割くような豪速球を間近で見ても妖夢は眉一つ動かさずに足場を均す。

「さて先ずはワンストライク……。さあどんどん行くよ！」

「……。」

楽しそうにモーションに入る神奈子に対して妖夢は小さく息を吐いてバットを握る。

同じように大きなフォームからまたも豪速球を繰り出す神奈子、それを黙って2度も見逃すような妖夢ではない。果敢に踏み込んで打ちに行く。

「ッ!？」

「お……！」

妖夢のバットに当たったボールは直ぐ真後ろにあるフェンスにぶ

つかり、カシヤンという独特な音を立てる。

(真後ろへのファウルボール…、タイミングを合わせてきたねえ…) 心底嬉しそうな顔をして妖夢を見つめる神奈子はまた投球モーションに移り、振りかぶる。

プレートに乗せた右足の踵すら上げて更に体重を乗せて放たれるボール、しかし妖夢はそれさえも捉えてみせた。が――

「――ッ!?!」

やや芯から外れ根本気味にボールはバットに当たる。そしてボールはバットをへし折り、弱々しく神奈子の頭上に浮き上がった。

ピッチャーフライとして落ちてきたボールを神奈子はしっかりと捉える。

妖夢は折れたバット握り締め、苦虫を噛み潰したような顔になりながらベンチに戻った。彼女に続く藍、メルランも神奈子の豪速球に凡打と倒れた。

多彩な変化球による変幻自在な投球の西行寺幽々子、豪速球による正面から制圧する豪快な投球の八坂神奈子。

タイプのまったく違う投手二人による投げ合いで、試合は硬直状態となった。

ちらほらと両チームともにランナーを出すことはあるものの、それが得点に繋がることはなく、お互いに点が取れないまま試合は最終回の表を迎えた。

最終回、9回の表。チーム妖怪の山の先頭打者は二番の権から。つまり4番の神奈子まで確実に回るのである。

「…幽々子様、行けますか?」

「勿論よく。任せて、ここをきっちり抑えてみせるわ。」

マウンドの上で口元を隠しながら話す主従バッテリー。幽々子の顔にはやや疲労の色が見え隠れしているが、それでも限界まで追い詰められてはいないようだ。

幽々子の言葉に妖夢はマスクを被ってマウンドを降りた。

既に打席には椀がバットを握って待機しており、鋭い目付きで幽々子を睨んでいる。

「……。」

何も話さず口を真一文字に結んだ椀はバットを構え、幽々子と対峙した。

ゆったりとしたサイドスローから放たれる幽々子のボールを椀は大きく踏み込んでフルスイングで打ち抜こうとする。

カツという音を響かせてボールはファールエリアに飛び込んでいった。

「ずらされたか……。」

バットの芯の部分を撫でてから椀はバットを構える。

幽々子もまた同じようにゆったりとゆつくりなフォームからボールを投げる。

神奈子のそれと比べると遅いそのボールは椀の内角高めインハイへと向かう。

(もらった！)

内角高めのコースは椀の一番好きなコースである。

椀は大きく踏み込み、フルスイングでボールをひっぱたきにかか
る。

しかしボールは椀のバットに当たる直前にまるで糸に引つ張られるかのように斜め横に折れ曲がった。

そしてスパンツという心地よい音が響く。

「ストライーツ！ ツーツ!!」

(ここに来てまだこんなキレイのある変化球を……ツ!?)

その後、椀は遊び玉無しで打ち取られ、続くにとりもファーストゴ
口に倒れた。

しかし本番はここからである。

『次は4番、ピッチャー、神奈子さん——』

神奈子の名前が呼ばれた瞬間にチーム妖怪の山側のスタンドが大
きく沸き立った。

神奈子は打席に立つと丁寧に足場を均し、バットを構える。

(……、ここで神奈子さんを抑えれば最低でも引き分けに持つていける。ここが踏ん張り所ですよ、幽々子様！)

妖夢はミットを叩き、幽々子を鼓舞してからミットを構える。

対神奈子用に準備してきた配球は何パターンもあり、今回もその中から一つ使うのだ。

だが――

「ふんッ!!」

ゴツという鈍い音が球場に響き、それと同時に高々と青空に吸い込まれるようにボールが放物線を描く。

そしてセンターのルナサが追いかけていくが途中で追いかけることを止めた。ボールはフェンスを飛び越えて行ったのだ。

ボールが柵を越えた瞬間、スタンドは大いに沸き、幽々子がマウンドに崩れ落ちる。

「「うおおおおおおおっ!!!」」

まさかのホームラン。

疲労によって甘く入った、いや入ってしまった緩い変化球を見事に持っついていかれたのだ。

その後、リリーフとして登板した紫の投球によって早苗を三振に打ち取ったチーム白玉楼であったがその空気は重かった。

「ごめんなさい、ごめんなさい……。」

ベンチの隅で幽々子は人目も憚らずに声を上げて泣いていた。しかし誰も彼女のことは責めないでいる。

調子が良すぎた為に彼女を引っ張り過ぎたのが原因だからだ。

最終回の裏、1点差の状況。先頭バッターは一番の橙からである。4番の妖夢に回すためには最低でも誰か一人は墨に出なくてはならないのだ。

仮に妖夢まで回ったとしても逆転するためには二点が必要だ。

そんな時、妖夢がベンチの前でバットを振っている橙達に声を掛けた。

「……………私が、私がこのチームを勝たせます。だから、橙さん、レテ

さん、紫さん、私にまで回してください。」

そう言つて妖夢は泣いている幽々子の前まで行くとそつとしゃがみ彼女の手を握った。

「泣かないでください、幽々子様。大丈夫ですよ、私がパカーンと打つて、幽々子様をミスを取り返しますから！」

「妖夢……。」

自信満々に笑顔でそう言つた妖夢に幽々子は少しだけ明るさを取り戻す。

そんな主従二人を見て橙、レティ、紫の3人は互いに頷き合う。

『一番、セカンド、橙ちゃん——』

ウグイス嬢のコールによつて打席に立った橙はベースに覆い被さるように構え神奈子を睨み付ける。

(当たつても罍に出る気か…、いいね、そう言うのは大好きさ。)

どうやつても罍に出る、そんな氣迫溢れる橙の姿勢に神奈子は口角を小さくつり上げて笑う。

そして大きな身体を活かした豪快なフォームに移つた瞬間、橙がバントの構えを取る。それを見たサードの早苗とファーストの雛が猛ダッシュで詰め寄り、投げ終えた神奈子も急いで前に走つた。

しかし橙はボールがバットに当たる直前にバットを引く。

「ストライーッ！」

「おけおけ、ストライク一つ貰つたよ。」

バントの振りをして神奈子を走らせるのが目的なのだと直ぐに勘づいた諏訪子は落ち着かせるように神奈子に言い返球する。

諏訪子からの返球を受け取つた神奈子は分かつていふと言ふように口の端に笑みを浮かべ、頷いた。

そして2球目も同じように橙がバントの構えを見せ、それを見た早苗と雛、神奈子が前に詰める。しかし2球目もまた橙はボールが中前にバットを引つ込めた。

(9回まで全部投げてて疲れてないはずがないんだ…。だから、すこしでも……。)

3球目、投げられたボールを橙は短く持ったバットで食らいつく。

木製バットの音と共にボールはフェンスにぶつかりカシヤンという音を立てる。

続く4球目、5球目と橙は神奈子のストレートをカットし続け、粘りを見せる。

しかし6球目、渾身の力を込めて放たれたストレートは橙のバットをへし折り、跳ね返されることなくミットに納まった。

「ヨオッシツ!!」

小細工すらも正面から振じ伏せた軍神が雄叫びを上げ、拳を掲げる。

額にうつすらと汗を浮かべているものの、表情はまだ余裕そのものである。

『二番、ファースト、レティさん——』

打席に立ったレティの顔は平静そのもの。ただいつもと違うのが彼女の構えが先程の橙と同じようにベース上にまで体が乗り出していることだった。

(レティもか…。良い度胸だ。)

ぐわっと大きく振りかぶり、豪快なフォームでボールを投げる。豪と音を立ててミットに迫るボールをレティは上っ面を叩いて叩き付ける。

「ファールっ!」

レティの打球はファールエリアに勢いよく叩き付けられた。

その後、何球も何球もファールエリアに打ち込み続け、驚異の粘りを見せるレティ。遂に球数が16を越えた頃に神奈子に変化が現れ始める。

「ふう…。ふう、ハア……………」

マウンド上の神奈子の額の汗が大きくなり、肩で息をし始めたのだ。額を伝う汗をアンダーの袖で拭い、大きく息を吸い込み呼吸を整える。

前に飛ばすことは出来なくてもこうしてファールにして球数を稼ぐくらいはやってみせるといふレティの意地が神奈子を追い詰める。

「ふうふう……………」

「この……。」

余裕を装うレティの顔に神奈子は眉をしかめる。

そして17球目を投げようと振りかぶった。これまでの16球、全てに手抜きはない。何故なら手を抜いたボールを投げた瞬間にはヒットを飛ばされるからだ。

「っ——らあっ!!」

吐き出すような叫びと共に投げられたボールは外角低めアウトローやや甘めに向かう。

(そこっ!)

甘めに入ってきたボールをレティは見逃さない。短く持ったバットをコンパクトに振り抜き、レティはボールを打ち返す。

小気味の良い音を響かせボールは打ち返される。

打球は勢いよく神奈子の股下を抜けセカンドベースの横、セカンド側に抜けようとしていた。

「まだまだあ!!」

あともう少しで二遊間を割ると言うところでセカンドの楯が飛び付き、グラブでキャッチする。

しかし飛び込んだ影響で直ぐにはファーストには送球できず、このまま安打になるかと言うところに——

「楯!」

「にとり!」

楯が飛び付いて打球をキャッチした瞬間にショートのとりにとりがその直ぐ側に駆け寄っていた。そしてにとりの姿を視界の端に捉えた楯はグラブトスをしてにとりにボールを放り投げる。

楯からトスされたボールをとりは直ぐ様ファーストに送球する。

ボールはレティがファーストに辿り着くよりも早くファーストの籬のミットに納まった。

「アウトツ!」

「オーケー、ツーアウトツーアウト!」

「あと一つです!」

塁審によるアウトコールにより、チーム妖怪の山のナインは大いに

盛り上がる。

センターの文やサードの早苗と言ったムードメイカーが率先して声を出して盛り上げ、妖怪の山側のスタンドも大声で囃し立てる。

『三番、ピッチャー、紫さん——』

ツーアウトまで追い込まれた白玉楼側の次のバッターは幽々子の親友でもある紫。

大きく息をついた彼女はゆっくりと立ち上がりネクストバッターズサークルから打席に立つ。

そんな紫の表情は普段の彼女からは予想もつかないほど緊張でひきつっていた。

(……、私が打てなきゃ、負け……ね。)

ザツザツとバッターボックスの土を均しながら紫はマウンド上の神奈子を見つめる。

神奈子もまた大粒の汗を頬に伝わせ、肩で息をしている。余裕のないのは向こうも一緒か、と紫はそれまでの緊張を振り払いバットを構えた。

神奈子は大きく振りかぶり、いつもと変わらないフォームでボールを投げる。

豪と音を立てミットに向かうボールを紫はファールエリアに打ち込んだ。このチーム白玉楼の中で紫のバッティングセンスはかなり高い。長打力こそ妖夢や藍に劣るものの、ヒットを量産すること、ランナーを進めるつつ自分も生きることに関してはチーム随一の物を持っている。

そのセンスで以て長打力と安定性を兼ね備えた妖夢に繋ぎ、得点に繋げるのが紫の仕事なのだ。

しかし今日は一度もその仕事を果たせていない。打順が回ってきてもヒットを打ってチャンスを妖夢に渡せなかった。このまま終わることなど彼女のプライドが許さない。

(だから、なんとしても今は妖夢に繋ぐわ!)

キリッとした顔で紫はバットを握り締め、神奈子を睨む。

神奈子は既にファールに移っており、試合も大詰めというこの場に

おいてもその豪快なフォームに陰りはない。

「ぬうらああっ!!」

雄叫びと共に放たれた豪速球、紫はシャープなスイングで打ち返す。打球はマウンド上で跳ね、神奈子の横を抜けようとする。

しかし神奈子は足を差し出し、駆け抜けようとするボールの勢いを削いだ。

神奈子の足に当たり、勢いの弱まった打球はそのままサード方向に大きく跳ねる。

「早苗ええっ!」

「はい、神奈子様!!」

強い打球を警戒してやや深めに守っていた早苗。紫のスイングと打球音を聞いて更に深く下がっていたのが災いしてか、急いで前進してもボールに届くまで少しばかりラグがあった。

急いでボールを拾い上げた早苗は直ぐにファーストに送球する。

(走れ、もつと速く……ッ!!)

手応えを感じ、打球が神奈子の真横に飛んでいったのを感じた紫はただひたすらにファーストベースを目指していた。

自分がアウトになれば其の瞬間に敗けが決まるこの場面、妖怪の山の内野陣が簡単にヒットを許すわけがないと確信している紫はそれこそ必死に走る。

ファーストベースに足をつけた雛が身体を伸ばしてミットを構えている姿を見て紫は焦った。もう既にボールは内野の誰かの手の内にある、そう感じた紫は土にまみれることも厭わず、ベースに向かつて飛び掛かるように頭からダイブする。

紫がダイブし宙に浮いてからコンマ数秒にボールが雛のミットに収まる音が響いた。

巻き起こる砂煙、一瞬訪れる静寂。

全ての選手、観客達が固唾を飲んで審判の声を待っていた。

砂煙が晴れ、紫の手と雛の足元が露になると審判は両手を大きく左右に広げる。

「セーフ!!」

判定の結果はセーフ。紫の手がベースに触れ、一方で雛の足は塁から僅かにだが外れていた。

セーフの声を聞いた瞬間にチーム白玉楼側のスタンドが盛大に沸く。

紫は泥だらけになったユニフォームを払うこともせずベースの上に立ってベンチに向かってガッツポーズを見せる。

そんな彼女の仕草にベンチの全員が笑顔で声を返した。

「ご、ごめんなさい…。私のミスで…。」

「いえ、私があんなに深く守っていなければ…。」

マウンド上に集まった妖怪の山の内野陣、特に雛と早苗は暗い顔をしていた。

二人は自分を責めるようにして周りのメンバーに謝っているがそんな二人の頭に神奈子が軽くチョップをお見舞いする。

「問題ない。要は次の妖夢を打ち取りさえすれば良いんだ。だから気にするな。私は負けんよ。」

神奈子は力強くそう言うのとマウンド上の内野陣に散らばるように指示を出す。

マウンドから散らばり、定位置に戻った彼女らの顔は生き生きしていた。

「さて、ドラマチックに決めますか…。」

そう呟いて妖夢は打席に立つ。

妖夢達によるサヨナラ勝ちか、それともこのまま神奈子が抑えて妖怪の山が逃げ切るのか。そんな状況に観客達は大きな盛り上がりを見せる。

「くく…。ああ、面白い。」

「今度こそ打たせてもらいますよ、神奈子さん。」

好戦的な笑みを見せる神奈子と、それと対峙して尚余裕のある表情の妖夢。妖夢は神奈子に対する挑戦の言葉を吐くと同時にバットを

白玉楼側のスタンドに向ける。

「狙わせてもらいます。このチーム白玉楼の4番、魂魄妖夢に！ 打てぬ球はあんまりない!!」

予告ホームランを宣言した妖夢はそう言って力強くバットを構えた。

そんな妖夢の振る舞いに神奈子は嬉しそうに笑う。

「面白いー やってみなよー この山の神、軍神、八坂神奈子の荒ぶる御魂を味わうと良い!!」

神奈子は笑顔でそう宣言し、いつものように振りかぶる。もはやラナーの紫のことなど眼中にもないと言った様子だ。

大きな身体をしながらミットに直進するボールに対して妖夢は躊躇いなく打ちに行く。

木製バットのカツという心地よい音が響き、ボールが高々と青空に打ち上がる。

力強く打ち上がったボールに観客達は歓声を上げる。ぐんぐんと伸びていくボールはレフトスタンド方向に飛んで行く。

「ファールっー!」

「二あ〜!」

妖夢の放った打球はスタンドのファールエリアに飛び込んだ。

あまりにも惜しいその軌道にチーム白玉楼員頭の観客達は嘆息の声を上げる。

しかし妖夢は悔しがる素振りも見せず、平然と足場を均して構え直す。

「やるじゃないか。」

神奈子はボールを受け取ると早速振りかぶる。

もう既に疲労も来ているはずなのに、いつもと変わらないフォームで神奈子はボールを放つ。

これまでと変わらない威力のストレートはそのままストライクゾーンの外角低めに向かって飛んで行く。

外角へのボールとあって妖夢は思いつき踏み込み、神奈子のスト

レートをはひっぱたいた。

きつちりとバットの芯で捉えられたボールはぐんぐんと今度はライト方向に向かって伸びていく。

だがボールは途中で切れていき、ファールとなった。

ファールエリアにボールが飛び込むとまたもやスタンドから声が響く。

「レフト、ライト…と来たら次はセンターですよね？」

ボールの行方を目で追っていた神奈子に妖夢は不敵に笑いかける。

そんな風に話し掛けられた神奈子の首筋を一筋の汗が伝う。心の中に小さな動揺を走らせた神奈子を察したのか諏訪子がタイムを取ってマウンドに駆け寄る。

「神奈子、もう直球一本勝負とか言ってられないよ。ここは遅い釣りで慣れた目を一回切って…。」

「……………ここで逃げる…か？ それは無理だな。」

「神奈子ー！」

勝ちに行く提案に首を振る神奈子に対して諏訪子は諫めるように声を荒らげる。

目の前の勝負に拘って大事な試合の勝ちを棄てるという行動に諏訪子は彼女の真意を問い質す為にならずいと詰め寄った。

「勘違いするな諏訪子、私は何も敗けるつもりはない。私は勝つぞ。」

諏訪子と目を合わせた神奈子の瞳にはまだまだ闘志が燃えていた。

そんな彼女の瞳を見た諏訪子は呆れたように溜め息を吐き、〃仕方ない〃と口にする。

「そこまで言うなら神奈子を信じるよ。勝とう。」

「ああ。」

諏訪子は笑って右の拳を差し出し、神奈子もそれを見ると力強く頷き笑いながらその拳に自分の拳を突き合わせた。

ニヤリと笑い合い、諏訪子はマウンドから降りていく。

(……………さて、恐らく神奈子さんの性格的に遊び球はないでしょう。なら、打ち返すのみです。今度こそ、真芯で捉えます！)

諏訪子と神奈子が話している間、打席を外しブンブンと素振りをしている妖夢はイメージしていた。ありとあらゆるコースに投げ込まれる神奈子の豪速球を。

そうしている内に諏訪子が戻ってきた。マスクを被り、その場にしゃがむ諏訪子を見て妖夢が打席に戻り、バットを構える。

「さあ、勝負だ。魂魄妖夢！」

神奈子は大きく振りかぶる。プレートに乗せた右足の踵を限界まで上げ、持てる全ての力をこの一球に乗せる。

「——っ、あああああッ!!」

渾身の力を、全身のエネルギーを込めて放たれた一投はど真ん中に構えられた諏訪子のミットに飛んで行く。

それは神奈子のプライドと意地を懸けたストレートだ。

そのボールに対し妖夢は怖れることなく踏み込み、全力でバットを振る。

カンツ——そんな静かな音が鳴る。

その音と共に白球が空へ浮かんでいった。

雲一つ無い青空に吸い込まれるように飛んでいった白球はぐんぐんとセンター方向に伸びて行く。

空に浮かぶボールを見つめ、球場は時が止まったかのような静けさに包まれる。

ゆつくりとセンター方向に向かって飛んで行くボールを追ってセンターの文は1歩、また1歩と下がっていく。

そしていつの間にか文の背中では外野フェンスにぶつかった。

しかし白球はまだその高度を十分に保っている。

そうして数秒後、ドサツと外野フェンスの外に作られた芝生に白球が落ちた。

「だから言ったでしょう？　“打てない球はあんまりない”…と。」

そう小さく呟いた妖夢は軽くバットを放り投げ、一塁ベースに向けて歩き出した。

するとそれまで静寂に包まれ、時間の止まっていた球場が再び動き出す。

「“うおおおおおおおっ!!!”」

劇的なまでの妖夢のホームランに、スタンドの観客達は鼻根のチム関係なく大きく声を上げる。

中には感動のあまり涙を流して立ち上がり、拍手を送る者さえいた。

ダイヤモンドを一周し、最後にホームベースを踏みしめた妖夢を出迎えたのはチームメイト達からの熱い抱擁だった。

「皆さん、やりましたよー！」

手荒いながらも優しい出迎えに妖夢は顔を綻ばせながら声を掛ける。

その言葉に皆はまた勢いを増して彼女を揉みくちやにする。

第3イニング part 1

今日、幻想郷の球場はざわざわとした空気で溢れていた。

この日の組み合わせはチーム旧地獄対チーム命蓮寺だからだ。

火が着いた時の爆発力はGBL8チームでも随一のチーム旧地獄とスカレットデビルズのように全体が高い水準で纏まったチーム命蓮寺との試合に既にスタンドはざわついている。

「ハッハッハッ！ この日を待ってたんだよ！」

「そうだねえ、楽しみだよ。」

チーム旧地獄のベンチ前では4番の星熊勇儀と5番の伊吹萃香がバットを握りながら笑っていた。

この二人がチーム旧地獄の得点の大半を担っている鬼である。

その二人の視線は共にマウンド上の村紗に釘付けだ。彼女は投球練習でしっかりとマウンドとボールの感触を確かめるようにゆっくりとしたフォームで投げる。

ボールがミットに収まり、スパーンという乾いた心地よい音が響き、村紗は調子が良さそうに笑った。

その周りでグラウンドの状態を確かめるようにボールを回しているナイン達はそんな頼もしいエースに信頼の眼差しを向けている。

「ナイスボールじゃ村紗。この調子で行くぞ。」

「了解、マミゾウ。」

キャッチャーのマミゾウからの返球を受け取り、村紗は肩を回す。緊張の様子も見られず、好調なようだ。

『1回の表、旧地獄グラウンドオーガスの攻撃は、一番、シヨート、お燐さん——』

そうして試合は、チーム旧地獄の先攻でスタートする。

ウグイス嬢のアナウンスが球場に響き、先頭打者のお燐が左のバツターボックスに立つ。

「……。」

「おや、そんなに睨まないでくれよ。怖くてバツトが持てなくなつちまうよ。」

静かに闘志を燃やしてお燐を睨み付ける村紗に彼女は軽口を叩いてみるものの、村紗は何も反応せず、振りかぶる。

そして大きく足を踏み込んで上体を深く沈み込ませ、地面ギリギリからボールをリリースした。

低い所から浮き上がるようにミットに向かって飛んで行くボールはマミゾウのミットに収まると力強い音を鳴らす。

「ストライーッ！」

サブマリン投法から放たれたボールはお燐の内角低めを抉り、ストライクゾーンに収まる。

そんな強気に攻めてくる村紗のボールにお燐はコクリと頷いてバツトを握り締めた。

(相変わらずえげつないボールだこと……。見辛くて仕方ないつたら……)

コンコンとバツトでホームベースの四隅を叩いたお燐はまた構え直す。

特に力んだ様子もなく構えるお燐を見てマミゾウは小さく舌打ちをする。

そして2球目、勢いよく振りかぶり、伸び伸びとしたフォームから放たれるボール。コース的には外角低めギリギリと言ったところ。それをお燐は大きく踏み込んで芯で捉える。

木製バツトの音と共にボールはキレイに飛ぶ。が、しかし打球はそのままサード寅丸の真正面にライナーで向かっていき、キャッチされずアウトになった。

「あれま……。芯で当てすぎたね、こりゃ。」

アウトになったお燐はコンコンとヘルメットを軽くバツトで叩きながらベンチに戻っていく。

そして次のバッターであるさとりとすれ違った。

「おや、旧地獄の大將がもう登場かい？」

「ええ、適材適所ってやつですよ。」

キャッチャーマスク越しにマミゾウはさとりに話しかける。彼女の一番の特徴であるサードアイは上から八雲印のガムテープが貼られ閉じられている。

心を読まれる心配は無さそうだと感じたマミゾウはジェスチャーでマウンドの村紗にリラックスするように言う。

マミゾウに促された村紗はコクリと小さく頷くとぐるぐると首を回して、プレートに足を乗せた。

大きく振りかぶり、身体を沈み込ませ地面ギリギリから放たれるボールをさとりはピクリとも動かずに見逃した。

「ボールッ！」

(…好きなコースをボール1個分外しただけなのに反応しないのかい?)

全く動かずに見逃したさとりを横目で見ながらマミゾウは村紗に返球する。

村紗はボールを受け取ると直ぐ様モーションに移った。

見惚れるほど洗練されたアンダースローから繰り出されるキレのあるボール、コースは先ほどと同じく内角ベルトの高さ。先ほどと違うのは、これがストライクのコースだと言うこと。

さとりはボールがストライクだと見るや否や、直ぐ様踏み込んでバットを振る。

「ッ!？」

がボールは急速にさとりの身体の方に曲がり、バットの根本に当たる。

当たった場所が悪かったボールは力なくサード方向に転がっていった。

「星！」

「オーケー！」

ボールが転がった瞬間に走り出していた星はぼてぼてと転がるゴ

口を捕球しすぐにファーストへと送球する。

「アウト！」

さとりがファーストに到達するよりも前にボールが送球され、塁審がアウトを宣言する。

さとりはその場で引き返し、ベンチに歩いていく。

「うにゆ？ さとり様、腕、どうしたの？」

「…すごく痺れました…。私がピッチャーでなくて良かったです。」

ネクストバッターズサークルにいたお空の質問にさとりはプルプル震える腕を見せる。

「…高速のシュート、ですね。直球だと思ったのですが…。」

そう言っさとりはさすがごとベンチの中に入っていった。そんな彼女の後ろ姿を見送ったお空はうんつと頷いて打席に入るのだった。

チーム旧地獄の三番を任されるお空は左打ち、左打席に入ってしっかりバットを構える。その右手には特徴的な制御棒がない。

(さて、ストレートに滅法強いつて話じゃが…。)

打席に立つお空を横目に見ながらマミゾウは村紗にサインを出す。村紗もマミゾウのサインに納得して頷くと大きく振りかぶる。

大きく踏み込み、思いつき腕を振り抜いてボールを投げた。

「うう〜！」

外角高めに投げられたボールに対してお空は思いつきり力強くバットを振り抜いた。が、しかしそのスイングは宙を切る。

「ストライーク！」

「…うにゆ？」

確かに捉えたはずなのに、とお空は首を傾げて後ろを見る。

ボールをキャッチしているマミゾウのミットは外角高めの位置ではなく、位置的にはベルトの高さやや低めほどの位置だった。

「ナイスボール！」

「おうー！」

マミゾウの声にガッツポーズしながら村紗はボールを受け取る。

そして直ぐ様モーションを開始した。

「ううー！」

地面ギリギリから浮き上がるように向かってくるボール、そして的確に織り混ぜられる変化球に手も足も出ずにお空は凡退するのだった。

「さて…。ぬえ、頼みますよ。」

「任せてよ。」

聖の言葉にぬえはウインクで返事をして打席に立つ。

ワクワクしたような好奇心旺盛な顔つきで打席に立つぬえ、その視線の先にはマウンドに立つお空の姿がある。

ざっざつとマウンドの土を整えるお空。そして良い具合に均し終えると足をプレートに乗せて振りかぶる。お空のフォームは左のオーバースロー、お手本のようにキレイなフォームから豪と音を立てて豪速球を投げる。

「ふっ…！」

内角高めに投げられたボールをぬえは苦もなく打ち抜いた。

鋭く低く跳ねる打球はそのまま二塁ベースのショート側に飛んで行く。

その打球にショートのお燐が飛び付いてキャッチしようとするが、あともう少しと言うところ、グローブの先で弾いてしまう。

そうやって打球の軌道がそれている間にぬえは一塁に到達した。

「う、うにゅ…。」

ノーアウトのランナーにお空は次のバッターを見る。

そこには飄々とした顔をしたマミゾウがバットを握って立っていた。

「さてお仕事じゃなあ。」

自分の深さに打席の土を整えてバットを構えるマミゾウ。

それを見てお空はセットポジションから素早く投げる。その瞬間にぬえは二塁ベースに向かってスタートを切った。

「走った！」

「うにゅ?!」

お空はセカンドのヤマメの声に首をかしげながら投げ終える。捕手である萃香も取つてすぐ投げるために体勢を変えるが、その必要はなかった。

カツと言う音を響かせてマミゾウの打球が一二塁間を破つて飛んで行く。

「うそっ!?!」

外に外したストレートを狙い打たれたお空は驚きの声をあげる。

打球はライトのパルスイがキャッチし、ファーストに投げようとする。だが、パルスイが送球する直前にさとりが大きな声で叫ぶ。

「っ! 3っ!!」

「えっ!?!」

パルスイがさとの声によつて三塁方向を確認すると、そこには既にセカンドベースを蹴つて三塁に向かうぬえが視界に映つた。

急いで彼女は三塁に送球する。

しかしボールが三塁に届くよりも早くぬえがサードベースに滑り込んだ。

「セーフ!」

「へへ、やったね。」

塁審が両手を左右に大きく開くと、ぬえはベースの上に立つてベンチに向けてガッツポーズをした。

1回表から到来した大きなチャンスにチーム命蓮寺側のスタンドもベンチも大いに沸く。

『次は三番、ライト、一輪さん——』

ウグイス嬢のアナウンスで一輪が打席に立つ。

伸び伸びとした自然体の構えで打席に立つ一輪からは普段の優しい印象からは程遠い威圧感を覚える。

「どうするっ?」

「一点は仕方ない場面だろ、普通にやろうぜ。」

ノーアウトランナー一、三塁という状況にチーム旧地獄ナインは外野手も含めてマウンドに集まっていた。

そしてサードを守る勇儀から「一点は棄てる」という言葉が出る。その言葉にキャッチャーの萃香も、ファーストのさとりも確かにと言うような顔で頷いた。

「ここは確実にアウトを取っていきましよう。幸いまだ1回の表ですし。」

「そうだねえ、それくらいならまだまだ取り戻せるし。」

チームのまとめ役であるメンバーが勇儀の言葉に賛同すると、他のメンバーもそれに頷く。

そうして方針が纏まったナインはそれぞれのポジションに散っていった。

「負けないよ〜！」

ふんすと鼻息を荒くしながらお空はセットポジションからボールを投げる。内角高めを厳しくついたボール、しかしそれを一輪は苦もなく外野に持つていった。

その打球をセンターのこいしが捕球し、内野に返球している内にサードランナーのぬえはホームベースを踏み、先制点を挙げる。

「まだまだ甘いですね。」

一塁の一輪はバッティンググローブを外すと、一塁コーチャーに渡して呟いた。

そしてノーアウトでランナー一、二塁と依然としてピンチの状況は変わらず、迎えるのはチーム命蓮寺の4番、寅丸星であった。

第3イニング part 2

『次は4番、サード、寅丸さん——』

ノーアウトランナー、二塁というチャンスに寅丸へ打順が回るとチーム命蓮寺側のスタンドに座る観客達が一斉に歓声を上げた。

打席に立つ星の目付きは鋭い。それこそ野生の虎を思い起こさせるように鋭く、凜とした空気を纏った彼女に普段のおっとりとした姿はなく、毘沙門天の化身であることを充分に理解させる威圧感を放っている。

「……。」

「うにゆう……。」

無言で睨み付けてくる星を見てお空は少し弱気な声を上げるものの、直ぐにブンブンと頭を振って気持ちを立て直す。

そして一塁と二塁のマミゾウ、一輪を一目見てからクイツクモーションで投球を行う。

(……空さん、確かに貴女は優れた投手だ。球威のあるストレートに速度とキレのあるフォーク。けれど、どんな球がどこに来るのか分かっていれば——)

星はまるで予めどのコースにどの球が来るのか分かっているかのように踏み込み、お空のフォークを完全に芯で捉えた。

(打つのは容易いのですよ。)

きつちりと振り抜かれたバットは芯でお空のフォークを捉え、カツという音を響かせる。

そして打球はセンターへとぐんぐん伸びていき、外野のフェンスを軽々と越えていった。4番の星が叩き出したスリーランホームランに会場は大いに沸き、星もその歓声に応えるようにガッツポーズをしながらダイヤモンドを回る。

これで4対0、1回の表からチーム命蓮寺が大きくリードする展開となった。

しかしそれでもまだノーアウト、命蓮寺の攻勢は続く。

星の次に打席に立つのはチーム命蓮寺の代表、聖白蓮。

ウグイス嬢のアナウンスで立ち上がると、一礼してから打席に入る。

静かに、しかしそれでも刺すほどに伝わってくる闘志にお空は息を呑む。

しかしそれでもまだお空は折れていない。ランナーがいなくなったことで気にすることなく振りかぶり、目一杯の力を込めて投球する。しかし――

「南無三ツッ！」

5番聖のダメ押しと言わんばかりのホームランがスタンドに刺さり、

「しゃあらあっ!!」

6番村紗がヒットで続き、

「一本足打法!!」

7番小傘によるタイムリーでまた失点を重ね、続くナズーリン、響子の連続安打でまたまたノーアウトランナー一、二塁のピンチを迎えて、打者一巡となった。

これで既に7対0、初回から大差を付けられたチーム旧地獄のメンバーはまたもやマウンドに集まる。

「…うにゆう…、ごめんなさい…。」

「謝んな。この程度の点差、誤差でしかねえよ。」

マウンドの上では顔面蒼白状態のお空がうつ向きながら他のチームメイトに謝る。しかしそんなお空に対して勇儀が彼女の頭を撫でながら声を掛ける。

「まだ負けてねえから悄気んのは早えぞ。」

「はい…。」

「…てか、なんだってこんなに打たれるのかって話なんだけど…。」

「前の2試合、輝針ジョーカーズと人里青年団との試合の時はちゃん

と抑えられてたのに…。」

今シーズンに入ってから最初の2試合を思い出して、マウンド上のメンバーは頭を傾げる。

「…萃香さん、サインは変えてますか?」

「ああ、一応試合の度に変えてはいるよ。だからサインを見られてる訳じゃないはずだ。」

「そうですか…。」

萃香の返答にさとりはむむむと唸ってまた考え始める。

4番星や5番聖の分かっているかのような踏み込み方とスイングに違和感を覚えたさとりは必死に頭を動かしてこのビッグイニングの原因を探し出し、ある結論に辿り着いた。

「フォームか何かの癖で、読まれている…?」

「んー、あー、確かに無くはないだろうね。だとするとお空はこの試合は替えた方がいいかもな。」

さとりの言葉にキャッチャーの萃香がヘルメットを叩きながら言う。

すると隣に立っていた勇儀がハアと息を吐いてお空の肩に手を置いた。

『旧地獄グラウンドオーガス、選手の交代をお知らせします。ピッチャーの空さんに代わりましてピッチャー星熊さん。ピッチャーの空さんがライトに、ライトのパルスイさんがサードに入ります。』

アナウンスが掛かり、それぞれのポジションについたチーム旧地獄のメンバーはまだまだ諦めた表情をしていない。

そしてマウンドに立つ勇儀はゴリゴリと首を回して打席に立つぬえを見下ろした。

そして大きく振りかぶると大きく左足を掲げるようなフォームから勢いよく踏み込んで自慢の豪速球を萃香のミットに叩き付ける。

「っ!」

「ストライツ!!」

目の前を通りすぎて行った暴風のようなストレートにぬえはバツ

トを振ることも出来ずに見送った。

「ナイスボール！」

萃香はボールを勇儀に返球するとバンバンとミットを叩いてぬえを威嚇する。

しかしぬえは怯まずにいつものリラックスした体勢でバットを構えた。

そしてそれを見た勇儀は豪快に左足を振り上げて勢いつけてボールを萃香のミットに叩き付けるように投げる。

「シッ!!」

鋭いスイングでバットを振り抜いたものの、その球威に押し込まれセカンドの前に力なく転がる。

そしてそれをセカンドのヤマメが素早く処理し4―6―3のダブルプレーとなった。

そしてツーアウトでランナー三塁の場面、続く二番のマミゾウが打席に立つ。

(…:パワー一辺倒はやりにくくて仕方ないのう…。)

マミゾウはバッターボックスの土をスパイクで均しながら対策を考える。

もちろん投手星熊勇儀のことは頭に入れていたし、昨シーズンでも対戦している。がマミゾウはこの勇儀と神奈子のような力押しだけでぐいぐい来る投手が大の苦手なのである。

彼女にとっては幽々子や紫のような変化球や緩急を主体にする投手の方が攻略しやすいのだ。

「さて…。」

大きく左足を振りかぶり、全身の力と勢いを乗せて放たれるボール、空気を切り裂き音を立ててミットに向かうボールをマミゾウはバットで捉える。

力強く放たれた勇儀のストレートをきっちり跳ね返せず、ボールは力なく内野に転がった。

「おっしやっ!!」

ピッチャー前に転がるボールを豪快に右手で掴んだ勇儀はそのま

まファーストに送球して打ち取った。

「…手元でかなり伸びてきおるのお…。」

「……本当のエースはやはり勇儀さんですか、そうですか。」

チャンスから一転して攻守交代となったチーム命蓮寺の面々はそのまま守備に散らばっていった。

そして2回の表、迎えるのはチーム旧地獄の4番、星熊勇儀。

GBLの打者の中でも一際大きな長身の彼女は打席に立つと力強くバットを構える。その威圧感はあるほど、コレが鬼というものかと思わせるほどの力があつた。

(おーおー、怖いのお…。じゃが——)

前シーズンでもホームラン王争いに最後まで参加していたこの強打者を前にしても村紗の闘志は1ミリも萎えてはいない。どころかむしろ燃え上がっていた。

マミゾウからのサインを受けた村紗は大きく振りかぶり、体をぐつと沈み込ませる。

地面スレスレの位置から放たれたボールはそのまま外角低めアウトローに向かって直進する。

(……………)

「ボール！」

勇儀が打とうと踏み込んだ瞬間にボールが曲がり始め彼女はスイングの動きを止める。

そうしてボールを見送るとストライクゾーンから外れてミットに収まった。ボール一個分の僅かなズレも許さないと言わんばかりのコントロールで勇儀の打ち気を逸らしているのだ。

「……………」

「っ！」

そうして第四球目、大きく振りかぶって投げられたボールはまたもや外角低めに飛んでいく。

勇儀は大きく踏み込んでそのボールを捉えに行くが、ボールは手元で曲がり逃げるようにして外に行く。しかし——

「どおりやああっ!!」

「——!!」

踏み込んだままバットの先でボールを捉えた。

ゴツという鈍い音が響きボールは外野に飛んでいく。

「っ！ ライト!!」

打球はぐんぐんと伸びていき、ライト方向に大きな放物線を描いていく。

ライトを守る一輪も打球を視界に捉えながら下がる。そして遂に外野のフェンスまでやってきた。

そして高々とグラブを上突きだして落ちてきた打球を確保する。

「アウト！」

「「あ〜……。」」

「「ふう……。」」

もしかしたらホームランかもしれないと期待していた旧地獄側のスタンドからは落胆の声が漏れ、逆にあわやホームランかと思った命蓮寺側のスタンドからは安堵の溜め息が漏れた。

バットの先でこれだけ飛ばすのだから、もう少し芯に近ければどうなっていたらどうかと、スタンドの観客はゾツとする。

(ホンマに油断ならんパワーじゃのう……。)

アウトになってベンチに帰っていく勇儀の後ろ姿を冷や汗を流しながら見送るマミゾウは次に来る打者に視線を移した。

長身の勇儀と比べると、いや他の選手と比べても小柄と形容できるその幼い容姿、しかしその頭には種族を主張する立派な角が生えている。

伊吹萃香、旧地獄グラウンドオーガスの五番であり、星熊勇儀と並ぶ幻想郷の鬼だ。

「よろしくう。」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを見せる萃香は打席に立つと上体をゆるゆらと揺らしながらバットを構える。

先程の勇儀をどんな風にも揺るがない大木だとするならばこの萃香は言わば柳、どんな風であろうと受け流すのみだ。

(ビビるなよ〜村紗。)

(分かってるよ。)

アイコンタクトで意識を共有する二人、村紗は大きく振りかぶると萃香の胸元に鋭い一球を投げ込む。

スパンと快音を鳴らしてミットに収まり、審判がストライクをコールする。

「ナイスボール！」

「おっけ！」

マミゾウからの返球を受け取って村紗は帽子を深くかぶり直す。その仕草の途中にも萃香の様子を伺っていたが、彼女の心に揺らぎは見えない。

それならとマミゾウが出したサインに頷いて村紗が振りかぶる。

胸を張り伸びやかなフォームから放たれるボールはまたもや萃香の胸元に鋭く向かう。

「あらよつとー！」

「っー！」

「響子!!」

コツという音が鳴りボールはレフトに向かって高々と飛ぶ。

先程の勇儀の打球を思わせる大飛球にレフトを守る幽谷響子は急いで後退する。

(シュートで完全に詰まらせた筈じゃ、柵を越える訳がないんじや!!)

(あのどん詰まりで——!!)

飛球の行方を目で追うバッテリーは萃香とそして勇儀の力に瞠目していた。

そして遂に響子が外野フェンスまでやってきた。それでもまだボールは高さを保っている。

「えーいー！」

「うえ……、跳びやがった。」

響子はフェンスを蹴って上まで上ると更にフェンスから跳躍して飛球を掴み取る。

ここで見せた美技に観客は大いに沸き盛り上がる。しかしその一方でどん詰まりのまま、響子のファインプレーがなければホームラン

にしていた萃香のパワーを思い出して戦慄する者もいた。

「響子、よくやった！」

「えへへ、イエーイ!!」

チーム旧地獄が誇る大砲二門をどうにか抑えたチーム命蓮寺はその後の回もどうかして抑え、逃げ切りを選択する。

豪快なストレートの星熊勇儀と気迫と球種で抑える村紗水蜜の投げ合いに、試合はチーム命蓮寺リードのまま進んでいく。

クリーンナップの一輪、星、白蓮は勇儀のストレートに対応出来るものの、そのあとに長打が続かず致命傷を与えられない。

対する旧地獄も徹底して研究してきたマミゾウのリードで打たされて凡打に仕留められていた。

「このまま行けば逃げ切れますね。この調子で、油断せず行きましよう。」

「はい！ 姐さん！」

「怖い鬼はきつちり抑えられてる。マミゾウのお陰だよ。」

「ふふん、そうじゃろうそうじゃろう。」

「外野も気合い入れて行きますよー！」

七回になってベンチで円陣を組むチーム命蓮寺は明るいムードのまま和気藹々と会話をする。その様子に緊張も気負い過ぎもなく、リラックスした良いムードだ。

一方で負けているチーム旧地獄はというと――

「うにゆう……、私のせいだ、私が、たくさん打たれた、がらあ……。」
ベンチの中でお空が周りの目も憚らずにわんわんと泣いていた。
今ついている点差はお空が初回に取られた点数であり、それがそのままチームに重くのし掛かっているのだ。

しかしそんな風に自分を責めて泣いているお空の頭と背中に勇儀と萃香が手を置いた。

「泣くんじゃねえ。」

同時に全く同じ事を言われたお空は顔を上げる。

声の主は二人とも自信に溢れた笑顔でお空を見つめている。

「諦めんなや。まだ3イニングあらあ。そんだけありや7点なんざすぐだつての。」

「そーそ。それにお空の失点も元はあたしの責任だしねえ。」

「二人とも……。」

「任せろ、ひっくり返してやるよ。」

「そうだよ。安心して任せな。」

闘志は折れない。そしてその気持ちはチーム旧地獄全体にも波及していた。

それまでお空に引きずられ、どこか敗戦ムードだったベンチの中は明るい空気に入れ替わっている。

「さて、反撃開始と行こうか。」

「オー!!」

『一番、シヨート、おりりん……。』

「よっしゃー!!」

雄叫びを上げて打席に立つお燐。しかし……………

「ストライークツ!!バッターアウト!!」

緩まない。村紗水蜜は決して傲らない、手を抜かない。それが対戦相手への礼節と知っているから。

この回も村紗の投球は冴えを見せ三者凡退に切った。

チームのエースとしての意地だけではない。そう思わせる気迫を纏っていた。

しかしそれだけで終わる地霊殿ではない。彼女たちにも意地がある。

地獄の底にいた妖怪としての矜持と自負がある。

だからこそ……

「どっせらああつ!!」

「ふつとべええ!!」

二者連続ホームラン。鬼の意地、チームの一員としてのプライド、四番、五番の義務と責任、それら全てを乗せて放たれたアーチは軽々と場外に飛んでいった。

しかし

「ストライク！バッターアウト!!」

崩れない、揺るがない。決してへこたれはしない鋼の心臓。それが投手村紗の一番の武器だった。

一球一球に魂を乗せ、何があっても自分を見失わない村紗はこのGLでも最優の投手と呼ばれている。

結局この後の回も地霊殿は村紗を攻略できず敗北したのだった。